
楽しい人のころしかた

今井京一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

楽しい人のころしかた

【Nコード】

N5004F

【作者名】

今井京一

【あらすじ】

僕の名前は相澤優^{あいざわゆう}。趣味はひとごろし。こんな僕が繰り広げるほのぼのな学園らいふ？恋したりされたり、ひとごろしたり、旅行にいたり、ひとごろしたり、初めての経験したり、ひとごろしたり……さあ、ちょっと覗いてごらん。僕の非日常な日常を……

1話)センチメンタルな君と僕(前書き)

当作品は純愛思考のラブコメです。決して、ホラーではありません。ただ、すこしヤンデレなだけです。関連ワードは、妹ノブラコンノシスコンノストーリーカーノ優等生ノ幼なじみノアイドルノ人殺しノ臓器ノヤンデレノメンヘラノ恋愛ノ純愛ノラブコメ

1話)センチメンタルな君と僕

一面真っ青な雲ひとつない空。淋しいほど殺風景な空は僕の心の中みたいだ。

こんな空の下、僕は少女と向かい合う。しかし彼女は俯いたまま、なかなか言葉を発しようとしなない。

もう10分も経ったよ……そろそろ帰ろうかな。

痺れをきらせた僕は、彼女に背を向けて一歩足をあげた……

「あの!!好きです!!」

突然、放課後の屋上に響き渡る女の子の声。意を決したような、力強い声。僕は振り返って一言こつ言った。

「ごめん、坂本さんとは付き合えない」

そしてまた、彼女に背を向ける。

ごめんね……僕には君と付き合えない理由があるんだ。大切な、約束が……

僕は今度こそ屋上の出口へと歩みだした。

「どうして……どうして亜樹じゃ駄目なの!?!」

突然叫びだした坂本さん。 なんだ？
僕は振り返る。

「相澤君が付き合ってくれないなら私、死んでやる！！！」そして大きなカッターナイフを取り出して、自分の左胸にあてる。だがその刃先は小刻みに震え一点に定まることはない。

そんな一生懸命な彼女をみたら、僕は何故だか笑えてきた。

そしてもう一度、振り向き直して彼女の元へ歩を進める。

「な、何！？ いくら優しい言葉をかけてくれても、付き合ってくれないなら無駄なんだからね！！！」

彼女は慌てながらそんな言葉を発する。対する僕は、無言で彼女へと近寄る。

そして、彼女ともう一度向き合って、こう言う。

「ひとつ、いいこと教えてあげるよ」

更に一歩踏み出し、僕は、

彼女の身体を強く 抱きしめた。

「そんな震えた手じゃ、死ねないよ」

「うっ……あ、あ、あ……」

腕を離れた瞬間、目の前で崩れ落ちる彼女。左胸にはカッターナイフが突き立ち、傷口から血が滴り落ちる。口をぱくぱくと魚のように開け閉めしていて、何だか滑稽だ。

「よし、処理をしないとね」

坂本さんが完全に動かなくなったのを確認して、僕は彼に電話をかける。

『……プルルルプルルルプルガチャ もしもし？』

「あ、大樹？ 僕だけど、また新鮮なのが入ったから、今すぐ学校にきて」

なんだか魚屋さんみたいだな……まあ、似てるといえば似てる……か……

『本当か？今行く ガチャ……プープー……』

しばらくその場でのんびりと待っているよ、

「優、お待たせー」

彼は大きなケースを抱えてやって来た。彼の名は舛田大樹^{ますだたいき}。本人いわく、舛田の”舛”の漢字がどこぞの大臣と一緒になのがポイントらしい……何がポイントなのか、僕には理解できないけど……「それでこれが新しい奴か？お前にしては綺麗なやり方だな」

彼女を細部にわたってじっくりと見ながら彼は言う。なんだか言い方がム力つくな……

「僕にしては綺麗ってどういうことだよ。まるでいつもがよっぽど酷いみたいじゃないか」

「ははっ。だってホントの事じゃないか。それにしても、今日の品は完璧だな。肺も肝臓も眼球も……うん、ほとんどの臓器が完璧な状態だ。これならかなり値が弾むぜ？」

彼は、彼女の腹をまるで魚のように切り開き、こう言った。いつもながら思っけれど、彼の手捌きはいつ見ても素晴らしい。

そして僕があれこれ思っている間にも作業は進み、持ってきた大きなケースに臓器を慣れた手つきでしまっていく。

「それより、どうなんだ？お前の妹は」

ふと、大樹がケースに目を向けながら聞いてくる。

「まあまあ…かな」

そう答えた僕だが、実は僕には妹がいる。

しかし、妹はかなり珍しい病気にかかり毎日薬を飲まなければいけない。飲んでいれば普通の人と変わらないが、少しでも飲まないとすぐに体調を崩し、最悪の場合死に至る。だが、その薬は日本では認可されておらず保険がきかない。そのため、毎月金銭的に膨大な負担がかかる。臓器を大樹に売っているのもこのためだ。

でも、一人の命の為にこんなに沢山の無関係な人の命を奪っていいのだろうか……

「そうか。俺は、いいと思うぞ。ただ生きているだけの人間なんていてもいなくても変わらないさ」

難しい顔をしている僕の心境を読み取ったのか、大樹は明るくそう言った。

……

流れる沈黙。

ちなみに、ここまでシリアスな展開に引っ張ってきて悪いけれど、全て冗談。

そもそも、妹は全くもって健康だ。まあ病気といえば病気かもしれないが……ブラコンという名前のね。

ふふっ、騙さ……ゲフンゲフン

え？　じゃあ何故人を殺すのかつて？　そりゃあ、趣味だからだよ。みんながフィギュアを沢山集めるのと大して変わりはないよ。

しばらくして、片付けが終わったのだろうか、ふと、大樹が立ち上がる。

「よし、こんなもんだろ。臭いが少し残っちゃったが、そこはリセツシュでシュシュっとしといてくれ」

にひひと笑いながら大樹は言う。うーん…僕的には、リセツシュヨリファブリーズなんだけどな……

あれからちゃんと、常備しているファブリーズで消臭をしてから下校し、今は、僕は玄関の前にいる。

『ガチャ……』

「ただいまー」

僕がその声を発した瞬間、てくてくと、居間から足音が聞こえ、少女が飛び出してきた。

「おかえり、お兄ちゃん」

ぽふっ…と彼女は僕の胸に飛び込む。嬉しそうに目を細めている姿がなんともかわいらしい。

「いきなり飛び込んできたら危ないよ、美奈」

僕は飛び込んできた彼女に優しく言う。そう、彼女の名は相澤^{あいざわ}美奈^{みな}、僕の妹だ。そして、

「だって、お兄ちゃんと一緒にいたいから……」

ブラコンなんだよね。まあ、かくいう僕も人のこと言えた義理じゃあないけど……だって、かわいいんだもん……

僕たちはしばらくそのままでした。すると、

「お兄ちゃん、何これ…?」

美奈がいつものかわいらしい声でなく、低く抑揚のない声で聞いてくる。急にどうしたんだろっ…

「ん?どうかしたか?美奈」

「なんでお兄ちゃんの服に他の女の髪の毛がついてるの?」

つーっと髪の毛を弄りながら、これまた抑揚のない声で言う。妬いているのか…可愛い奴め。

「そういえば、今日女子とぶつかったから、その時付いたのかもしれないな」

僕はそれがあたかも本当のことにように答える。そりゃあ、妹は僕が趣味で人を殺してるなんて知らないからね。

「……………嘘つき」

このときの僕には彼女の言葉は届かなかった……………

「あ、それよりお兄ちゃん。さっき、アイツから電話が来てたよ」

「美奈、沙織のことをあいつとか呼ぶんじゃない」

こつんと僕は美奈に優しくげんこつをする。美奈は

「だって……………」などと言いながら頬を膨らます。ホント、かわいらしいなあ……………

それより、用件はなんなんだろう？

気になった僕は、部屋に戻り、沙織に電話をする。

『プルル もしもし、沙織です』

「ふう……………今日も優はかつこよかったな」

お風呂に入りながら、私は優の姿を思い出す。私の中は、優でいつ

ばいだな……」

お風呂から上がって、部屋に入ると、タイミングよく携帯が鳴りはじめ。優だ！

私はワンコールで通話ボタンを押した。

「もしもし、沙織です」

『あ、沙織？ 僕、優だけど、今日はどついう用事で？』

電話越しだけど、いつも通りの優しい声。私の、私だけの為に発せられた声が、私の耳に・肌に・心に染み渡る。

「うん、そうそう聞いてー、……………」

今日の愚痴やら何まで、私は優に伝えた。優は、しっかりと私の言葉を聞いてくれる。それだけでも、私は幸せだ……

『もうこんな時間だ。今日はここらへんにしようか』

どきっ…………私を幸せから突き放す言葉。本当はもっと話していたい……でも、気持ちとは裏腹に口は動く。

「うん、そうだね。じゃあ、また明日ね！ おやすみなさい」

『おやすみ……ガチャ……プープー……』

私は優の笑顔を中心に焼き付けながら、目を閉じた。

2話(仮題)

「うーん……いい朝だな」

目を開ければ、カーテン越しからでも太陽はこの部屋を照らし、空が快晴であることを伺わせる。

本当にいい朝……何だけど、美奈が僕の正面から抱き着いたまま寝ている。

無理矢理離すのも、心なしか可哀相に思えたので、僕は美奈の頭を撫でながらその寝顔を眺める。

しばらくして、

「ん、んむう……お兄ちゃん……おはよう……えへえ」

ぐはあっ……相澤優に42731のダメージ!!相澤優は力尽きた

……

なんて言ってしまいたくなるような、半分閉じたような瞳で目覚める美奈。目をごしごしとこすっているとこもポイント高いな。

しばらくこうしてギュッとされていたいけど、そろそろ起きないとね……

「美奈、僕もう起きないと遅刻しちゃうから……離して？」

僕がそう言つと、美奈は少し悲しそうな目をして、

「もうちょっと、お兄ちゃんときゅーっとしてたいよ……」

と言つた。

うん、お兄ちゃん、何時までもきゅっとしてあげよう！

え？ 学校？ 実は今日はないんだ、いや、そんなものはもともとこの世に存在しないんだよ という訳で、まだ寝ていることに決定した。

「えへへ、お兄ちゃん……」

今なら僕、キョン死にできる！

だが、幸せなときは長く続かないもので……ピンポンとチャイムが鳴り響く。

「優！ 迎えに来たよー！」

やっぱり。

彼女は水無月沙織^{ミナツキ サオリ}。僕と同じ悩みを持っているせいかな、何かと仲良

くしてもらっている。

「美奈、沙織が迎えに来たからもう行かないと、だから離して？」

「沙織……お兄ちゃん、アイツのところに行くの？」

お願いだから、そんな潤んだ瞳をしないでー！

「美奈、そういう訳じゃないよ。ただ、学校に行くだけだよ」

「お兄ちゃん、アイツのところ行っちゃ駄目！ アイツ、お兄ちゃんに何するかわかんないよ！」

突然叫びだす美奈。何を言ってるんだろう……沙織が僕に、危害を加える？ そんなわけないと思うけど。まあ、ただのやきもちかな

……

「大丈夫だよ。じゃあ、美奈も一緒に行こうか」

「うん……うん。それならいい」

そうと決まったらすぐに準備だね！ 僕は美奈をさっと抱き上げ、美奈を掲げながら速攻で準備を終わらせた……

美奈の着替え……は、いつも着替えさせてあげてるから問題ない。

……別に、変な意味ではないよ。

それからすぐに外に出ると、少女が立っていた。すっと伸びた背や整った顔立ちは、見るものを魅了し、10人通れば10人が振り向

くだろう……

「沙織ごめん！」

僕はそんな美しい少女に声をかけた。

「あつ、優やつと来……美奈ちゃんもいるんだ……」

「こんにちは……水無月さん……」

……

二人の間にわずかな沈黙が流れる。ええっと、どうして二人は仲が悪いんだろうな……

「あのさ、二人ともとりあえず学校に行こ？ 時間もそろそろ危ないしさ」

「うん、そうだね。優行こ」

「お兄ちゃん、行こ」

二人は僕を挟むようにして両隣に駆け寄り歩き出す。だが、二人は目を合わすことはなく、それぞれが僕に話し掛けてくる。

どうしたら二人とも仲良くしてくれるかな……と思案を巡らせてみる。

「優、今日は数学の小テストだよね？」

ふと、沙織が話し掛けてくる。……ええと、そうだったけ？

「そうなの？ 全然知らなかった……」

「ちゃんと先生言ってたよー。ちゃんと聞かないと駄目だよ」

よくある登校風景を演じてみた並木道の下。

しばらく話していると、あっという間に学校の前。美奈は終始俯きながら黙って歩いていた。……後で構ってあげないとな。

それよりも、

「」「相澤様！ おはようございます！」「」

「お、おはよう……」

はあ……また面倒なコホンっ、熱心な方々が僕の前に現れる。
べ、別に暇人だなあとか、邪魔だなあとか思っていないからね！
ここ、重要なのでメモしておくように……

おっと、そういえば美奈と沙織はどこだろう。

僕はぐるりと辺りを見回す。すると……

「沙織さん！！ お荷物お持ちします！！」

「い、いえ

「遠慮なさらずにお任せ下さい！！」

ははっ、沙織ドンマイ。

美奈はーっと……「お兄ちゃん、きよろきよろしてどうしたの？」

僕のすぐ隣にいました。熱心な方々は、あちらのほうでハンカチーフを加えている……って古いよ。

まあ恐らく美奈がみつなみなにしてやっ……自重します。

まあ、正直そんなことはどうでもいいんだよね。

「遅刻しちゃうから、もう行こうか、美奈」

沙織さんには悪いけど、僕には君は救えないのさ とうとう

とにして教室へ向かう。そこ、酷いとか言わないの。

教室へ向かう途中、

「お兄ちゃん、私のこと……見捨てないでね」

突然、そんなことを美奈が口にする。

「もちろん。そんなことしないよ」

むしろ僕のほうが、『お兄ちゃん臭いからこっちこないで』とか言われて、美奈が別の男に……

アッー！

「お兄ちゃん、何で泣いてるの？」

そう言って、美奈はハンカチで僕の涙を優しくすくう。なんていい妹だ……

「ううん、ちょっと目にゴミが入っただけだよ」

「ホントに？ あっ、私はこっちだから、じゃあね、お兄ちゃん！」

「うん、また後で」

返事を聞くなり、ぱたぱたと足をばたつかせ走っていく美奈。後ろ姿もかわいらしく、世の妹属性の者どもは恐らく一瞬でノックアウト

トだろっ……

そんなことを考えながら、僕はドアを開けた。

「……………」

今まで騒がしかった教室は少し静かになる。このクラスでは、僕に話し掛けてくる人は少ない。彼らを除いて……

「ゆうちゃん！」

「なんだよ孝宏……………」

ほらね。早速ちゃん付けで話し掛けてきたのは工藤孝宏^{くどうたかひろ}。中学校からの腐れ縁って奴で、未だに仲がいい。

「そうそう聞いて、昨日から隣のクラスの坂本っていう女の子が行方不明なんだって……………」

ひそひそと孝宏は僕に話す。そう、孝宏は僕の趣味のことを知らない……………」

「それでさ、普通は事件になるじゃんか。でも、その子^このことは警察ですら取り合ってくれないらしいぜ」

そりゃあまあ、裏組織がつるんでるからな……………警察も下手に動けないよ。でも、今は知らないふり。

「そうなんだ。なんか怖いね……………」

「安心しろ。優は俺が守ってやる！」

孝宏が大声で叫んだ瞬間、教室中がざわめきだす。ちよつと孝宏！
僕たちにガチホモフラグが乱立してるよ！

「冗談はよしてよ、孝宏……」

「冗談なんかじゃないぞ！俺は本気だ！」

だから、止めてー！

「優くんとかうくん……二人ともどうしたの？」

「ん？ あっ、咲おはよう」

「おはよう優くん、えへへ」

今僕たちに話し掛けて来たのは山本咲^{やまもとなつき}。咲も中学校からの友達で、このクラスで数少ない僕に話し掛けてくるうちの一人。ふわふわとした性格がなんとまたまらない……らしい。「二人とも、朝から騒いでどうしたの？」

そう言っつて首を傾げる咲。少し潤んだ瞳で上目使いをしている。

あっ、僕の後ろの川田君が卒倒した。

とまあ、そんなことはさておき、

「なん

「そうそう聞いてくれよ、俺はこれから優を守らなくてはいけなかった。何なら、咲も優護衛隊に入るか？」

僕の話を遮らないで……それと、優護衛隊って何なの！

「優くんを私が守るの？ 優くんを……はい！ 私入る！」

「その意気だ咲副隊長！ 優を悪の手から救うぞ！」

「了解であります、隊長！」

僕のことはほつといて、勝手に盛り上がる二人。もう、誰か助けて

……

その時、教室のドアが、ひかえめかつ激しく開かれる。

そして、教室の中に美しい少女が足を踏み入れる。その途端、クラス中は静まり返り、ほぼ全員の視線がその少女へと向けられる。……孝宏と咲を除いて。

「もう、置いていくなんて酷いよー！ 優ー」

そう言って、女の子は僕の方へ駆け寄ってくる。僕はその女の子に答えて言う。

「ごめんね沙織。僕、人込みは苦手だから……」

「うーん、じゃあ今度デートしてくれたら許してあげる」

別にいいけど、デートとかしたことないしな……遊びに行くにしても、美奈と行くくらいだし……

「別に

「私も行きたい！」

「俺も忘れるなよ」「……」

口を挟んでくる孝宏と咲。だから、僕の話を遮らないでってば！

でもまあ、この二人がいれば楽しそうだし、いいかな、なんて考えた僕のこんな提案。

「じゃあ、4人で遊びに行くんじゃ駄目かな……沙織？」

「うん、もちろんいいよ。みんながいれば楽しそうだしね。場所はどうしよっか？」

明るい口調で答えた沙織。だがその笑顔の中に、どこか淋しそうな悔しそうな様子が、僕には見えたような気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5004f/>

楽しい人のころしかた

2010年10月17日04時28分発行